

要 旨

プロデューサー型人材の能力と 思いやりの関係性についての考察

吉瀬 楓

現在、日本では社会で活躍できる優秀な人材が不足しており、起業家精神をもつ優秀な人材の育成が、教育の現場において重要な課題となっている。本研究では、自らで新しい価値を創造し、それを社会化することのできる人材として「プロデューサー型人材」を取り上げた。卒業論文の段階で、プロデューサー型人材の資質を調査するために、直接彼らと対面しインタビュー調査を行った。その際、プロデューサー型人材の思いやりの高さに触れたことから、プロデューサー型人材にとって思いやりが重要な資質になり得るのではないかという仮定に至った。そこで、プロデューサー型人材の能力と思いやりの関係性に注目し、今回の研究に着手した。本研究は、プロデューサー型人材の思いやりが高いという仮説をもとに、プロデューサー型人材の能力と思いやりの関係性を明らかにすることを目的とした。

プロデューサー型人材の能力と思いやりの比較調査を行うために、「思いやり尺度(内田・北山, 2001)」と「プロデューサー型人材のコンピテンシーリスト(藤澤, 2012)」を組み合わせた56項目のアンケート調査票を作成した。調査対象者として、プロデューサー型人材28名と、企業に所属する一般的とみなされる人材210名にアンケート調査を実施した。調査の結果は因子分析とt検定で分析した。

因子分析を行った結果、「思いやり尺度」は3つの因子で構成されていた。第1因子は「他者に対する思いやり・共感性」、第2因子は「他者への厳しさ」、第3因子は「涙もろさ」の因子と命名した。「プロデューサー型人材のコンピテンシーリスト」は4因子で構成されており、第1因子は心理的要因・行動的要因、第2因子は環境要因、第3因子は過去要因、第4因子は逆転項目からなる論理的で緻密な性格を有している傾向からなる因子であった。

t検定の結果、プロデューサー型人材は、一般企業に所属する人材と比較して、他

者に対する思いやりや共感性が高いということが実証され、プロデューサー型人材は思いやりが高く、彼らにとって思いやりが重要な資質であるということが明らかになった。このことから、プロデューサー型人材育成の場において、思いやりを育む教育が重要になってくることが示唆される。しかしながら、日本における思いやりは海外と比較しても低く、日本の教育現場が抱える課題として、思いやりを高める教育が進んでいないことが挙げられる。今後、この課題を解決することで、プロデューサー型人材のような優秀な人材の育成が可能になり、日本社会に変革をもたらすことができるだろう。